

台湾総統選・試される民主主義の成熟

法政大学教授

福田 円

「二国二制度拒否」が争点の選挙となり、国民党の失敗もあり圧勝した蔡英文総統。だが、内政改革路線は不人気、民進黨の求心力も低下し、二期目の政権運営は前途多難だ。

ふくだ まどか 一九八〇年生まれ。二〇〇三年国際基督教大学卒、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科入学。同大学修士課程、台湾・国立政治大学東亜研究所博士課程留学を経て、同大学院後期博士課程単位取得退学。博士(政策・メディア)。著書に「中国外交と台湾二つの中国」原則の起源 など。

一昨年十一月の、統一地方選での民進黨大敗の責任を問われた蔡英文総統は、党内予備選で頼清徳元行政院長の挑戦を受けたが、六月に総統候補となり、八月以降はリードを保った。頼は副総統候補となり、民進黨が一丸となって選挙戦を戦った。同党は香港市民に共鳴する台湾市民の声をうまく捉え、今回の選挙を「二国二制度」を拒否し、「自由と民主を守る戦い」だと位置付け、国民党が主張する対中融和は台湾の自由や民主を犯しかねないと主張した。

対する国民党は、候補者擁立をめぐる複雑な駆け引きを経て、統一地方選でブームを起こした韓国瑜高雄市長が総統候補となったが、党内エリートと韓を支持する地方勢力

は分裂し、最後まで団結できなかった。また、韓陣営は選挙戦略を欠き、「国家は安全、大金を稼ぐ」スローガンに具体的な政策は伴わず、失言やスキャンダルも相次いだ。さらに、立法委員比例選挙候補者リストの上位に中国との関係が緊密な退役軍人を指名するなど、党中央の選挙戦略も韓の足を引っ張った。

国民党が負けた選挙

七四・九%の高投票率には好天も味方したが、民進黨の若年層に対する投票呼びかけと、香港市民からの投票呼びかけの成果でもあろう。この結果、蔡英文は総統選挙史上

最多の八一七万票以上を獲得して再選された。民進黨は立法委員選挙の選挙区で四八議席、比例区で一三議席を獲得し、過半数を上回る六一議席を獲得した。

この選挙結果は、民進黨が支持を取り戻したというよりも、国民党が選挙戦略を欠き、中国と和解しつつ自立を保つための具体策を提示できなかったがゆえだと見るほうが妥当だろう。それは、立法委員比例区で民進黨の票が台湾民衆党など第三党へ流れ、国民党と同議席数しか獲得できなかったことに現れている。小選挙区においても、政策的な議論より、新鮮味のある候補者擁立、政治色が薄い宣伝方法など民進黨の巧妙な選挙戦略が目立った。

活発化する「ポスト蔡」への動き

蔡英文は統一地方選で改革の成果をアピールして失敗し、今回は改革への言及を抑えていたが、自陣営のリードが安定してくるとその頻度は増えた。この様子から、蔡は二期目も内政上の改革に力を注ぐものと予想できる。対外政策で大きな変化を望めず、内政上の改革で有権者の理解を得られなければ、選挙期間に持ち直した蔡への支持率は再び低迷する可能性が高い。

民進黨内では、ポスト蔡をめぐる駆け引きが激しくなる

だろう。現段階で有力視されるのは頼清徳と、統一地方選で民進黨が総崩れしたなか、桃園市長の座を安定的に維持している鄭文燦である。今後は、蔡英文が政権二期目でどのような人事を行うか、頼が副総統としてどのような役割を担うか、鄭がいつ、どのような中央のポストに就くのが注目される。

国民党は呉敦義党主席が辞職し、三月初旬に党主席選挙を行う。加えて、江啓臣や蔣萬安らエリートの若手有力者が党中央常務委員の職を辞した上で、党体制の抜本的な改革を求めている。他方、韓国瑜は総統選挙で惨敗したものの、前回の選挙より得票率を伸ばしたため、党主席選挙出馬も不可能ではない。高雄市長罷免を求める運動が本格化するなか、党内ではエリート対地方勢力の駆け引きが当面続きそうである。また、どちらが主導権を握るにせよ、習近平政権が「九二年コンセンサス」は「一つの中国」原則を体現するものだ主張し、同党の解釈が生存空間を失うなか、対中政策の調整が最大の課題となろう。

高投票率を記録し、自由や民主の価値を台湾や国際社会が再確認した選挙であったが、近年の台湾政治が抱えている構造的問題は何ら解決したわけではない。台湾における民主主義の成熟度が試されるのは、これからである。●